長崎県生月島の触とかくれキリシタン組織

野　崎　清　孝*

The "Fure Communes" and the Organization of the "Hidden Christians" of Ikitsuki Island, Nagasaki

Kiyotaka NOZAKI

(昭和55年9月11日受理)

はしがき

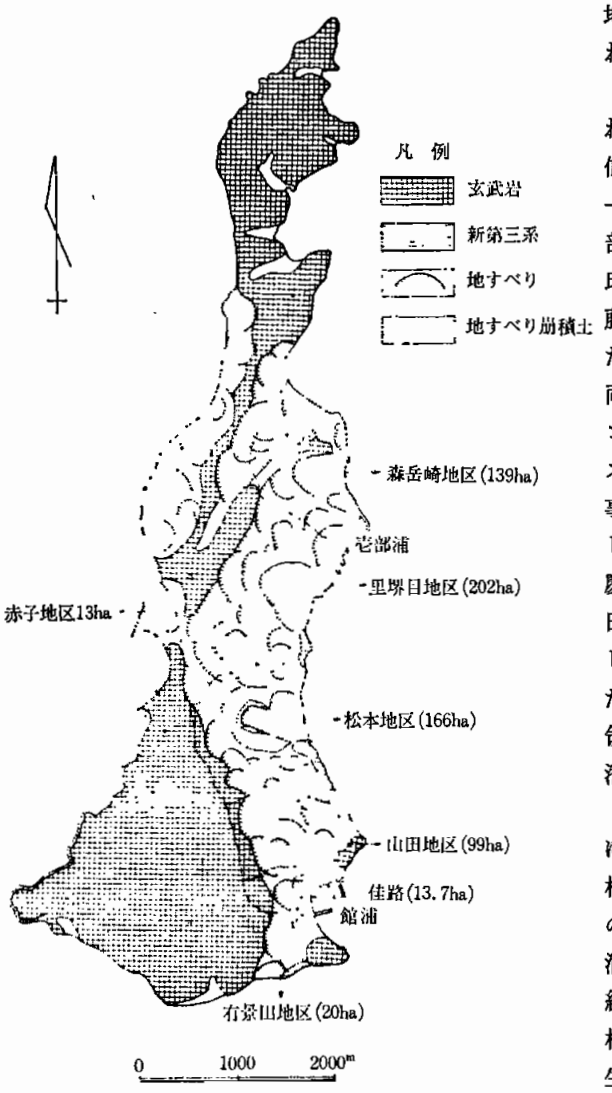
村落社会の内部構造や村落間を連ねる社会的結合の構成は村落を自生的個体，村落群を自生的地域としてとらえる面と村落を制度的個体，村落群を制度的地域としてとらえる面とのからみをときほぐす中でその起源が明らかにされる．この両面がどのような関係にあるかは村落社会研究の上でもっとも重要な鍵となり，これを解明するためには実態と史料の分析を通じて，時代を遡源することが必要である．

本稿では長崎県生月島の行政単位として存在した近世の触とこの地方に現在も残るかくれキリシタンの自主的組織の関係を明らかにしたいと考えた．かくれキリシタンに関する研究は田北耕也[1]・古野清人[2]・柴田実[3]・片岡弥吉[4]など主として民族学・民俗学やキリスト教史の側面から進められてきた．キリシタン史やかくれキリシタンの宗教儀式や行事についてはこれらの研究にくわしい．したがって筆者はこれらの研究をふまえ，かつ1976年と80年の2回にわたって行なった臨地調査にもとずいてその中で村落社会組織としてのかくれキリシタン組織の地域的展開に重点をおき，とくにその基礎的単位であるコンパンヤの内部構成を中心に報告したいと思う．

1　地域概観

幅 700 m の辰ノ瀬戸（生月瀬戸）をへだてて平戸島の西北に位置する生月島（長崎県北松浦郡生月町）は面積 16.52 km^2（水田 3.49 km^2，畑 2.45 km^2，山林 4.18 km^2，原野 3.27 km^2），人口10,007（1975年），南北 10 km，東西 0.4 ～3.0 km の細長い島である．番岳（286.0m），山頭（257.9 m）を中心とする中央部の山陵は西に片寄り，東西両斜面は著るしく非対称となっている．西側は海蝕崖のみられる急斜面で無住地域であるに反し，東側は集落の立地する居住地域で耕地化された緩斜面である．基盤である第三紀層とそれをおおう玄武岩質崩積層の間には地下水が貯留され，海岸に向って地すべりを起している．そのため県営事業として1953年以来，地すべり防止対策が講ぜられてきた[5]．防止指定地区としては森岳（竹）崎・里境目・松本・山田・佳路・有景田・赤子の各地区があり，総面積 653 ha 全島の39.5%に及んでいる．とくに松本地区では1967年の災害にともない土

* 地理学研究室



第1図　生月島の地質と地すべり(安藤武・大久保太治図)

地改良事業として区画整理が行なわれ，耕地の集団化が進められた[6]．

かくれキリシタンの島として知られる生月島には16世紀，領主松浦隆信・鎮信のもとに一部・加藤・山田→籠手田(こてだ)各氏が所領を得ていた．一部氏は一部浦，加藤氏は里，籠手田氏は館浦にそれぞれ居館を構え，加藤氏の場合を除いて今日その場所がたしかめられている．一部・籠手田両氏は洗礼を受けて熱心なキリシタンであったから領民の大部分はキリスト教信者となった．サンフェリペ事件（慶長元年<1596>）に端を発して揺動する禁教体制の中にあって慶長4年（1599），一部正治・籠手田安一がともにこの島を追われた．しかしながら領主によってともされた信仰のともしびは消えることなく領民は迫害を受けながら信仰を守り，潜伏して明治に至った．

元禄12年(1699)の『生属島絵図』によれば本島は一部村393石，生属村1217石（うち枝郷821石<山田>）の両村に分けられ，生属村には一部浦と館浦を含んでいた[7]．その後，組替えが行なわれ，近世末には生属村1693.873石（元禄時代の一部村と生属村本郷・一部浦）と山田1226.350石（元禄時代の生属村枝郷・館浦）の両村になっていた．生月島は近世を通じて壱岐島・平戸島・大島・度島(たくしま)・北松浦半島およびそれに続く彼杵郡の一部，東松浦半島西岸の鷹島・福島・五島列島の飛地とともに平戸藩領（77村→76村，63,200→61,700石）であった．1890年には生月・山田両村が合併して明治行政村としての生月村が成立し，1940年，町制を施行して今日に至っている．

集落は農業集落としての在と漁業集落としての浦に分かれる．かくれキリシタンは在に多く分布し，在から移転したものおよび未組織のものを除いて浦にはほとんどみられない．浦では文化・文政から弘化・嘉永（19世紀前半）にかけて益富捕鯨によって知られる捕鯨業が盛んであった[8]．在と浦との戸数は4：6（910戸：1,361戸<1976>）の割合を示し，一部浦と館浦はともにこの島の中心集落でもある．人口の産業別をみれば第1次産業61.5％（農林業23.4％，漁業38.1％）第2次産業12.1％，第3次産業26.4％（1975年）となっているが，在と浦との分業が顕著である．漁業は沿岸漁業から遠洋漁業に転換し，雇傭力を増したため漁業人口が増加の傾向にある．

2　触と地域集団

触は藩政村の下位の行政単位で名称の由来に関しては諸説がある[9]．平戸藩固有の触の呼称も今日では生月島と壱岐島に限られている．壱岐島では22の藩政村に含まれる合計99の触があってその領域は今日も行政区域として踏襲されている[10]．しかしながら本島では過去のことは明らかでないが，壱岐島のように区域を示さず集落単位の呼称となっている．触としては竹（岳）崎触・森触・堺目触・元触・正田（しょうで）触・馬場触・本触の7集落のほかに御崎集落がある．『延喜式』に肥前の牧の一つとして記されている生属の馬牧はここにあったと伝えられ，捕鯨業の盛んな時代に竹崎触・森触・堺目触・元触の入植者によって成立した開拓集落である．各触には庄屋に隷属し，これを補佐する朷頭（さすがしら）と呼ばれる村役が一名ずつ置かれた[11]．「郡方仕置帳，寛政7年（1795）」（『平戸藩法令規式集成』）に「於郡方高百石弐百石又三百石免を分ケ，田畑作受持候ものは上中下之無差別，一免限ニ組頭朷頭を定置，年貢其外諸懸り物取立万事申触，裁判為仕候御作法ニ候間，朷頭申付候者は人品者勿論物毎詳ニ行届候者を撰申付，村柄茂立直り候様可取計事」と朷頭の役割が規定されている[12]．平戸藩では藩政村のうちの免単位に知行地が分散化され，免は事実上の村落共同体の中核であり，村は単なる行政村に過ぎなかった[13]．大字名として今日，地籍に残る一部免・里免・山田免・南免がこの制度とどのように関係するかは明らかでないが，触に対して免は属地的呼称となっている．各触はそれぞれさらに組に分けられ，次のようになっている．

竹崎触―宇瀬・種子（しゅうじ）・初牟田（はつむだ）（新村）

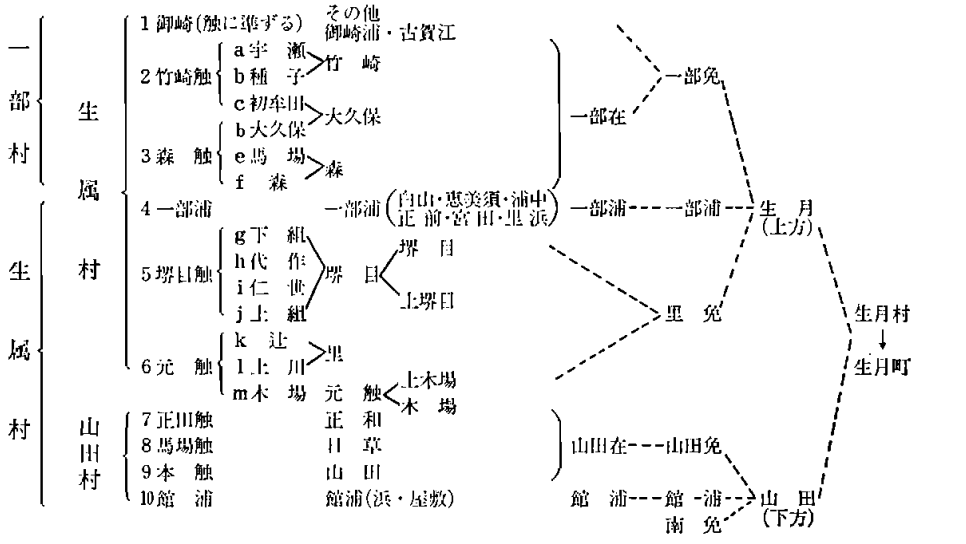
森　触―大久保・馬場・森

堺目触―下組（したぐみ）・代作・仁世・上組（うわぐみ）

元　触―辻・上川・木場（こば）（上木場・下木場）

なお正田触・馬場触・本触については組分けがない．さらにこれらを整理・改変して今日，

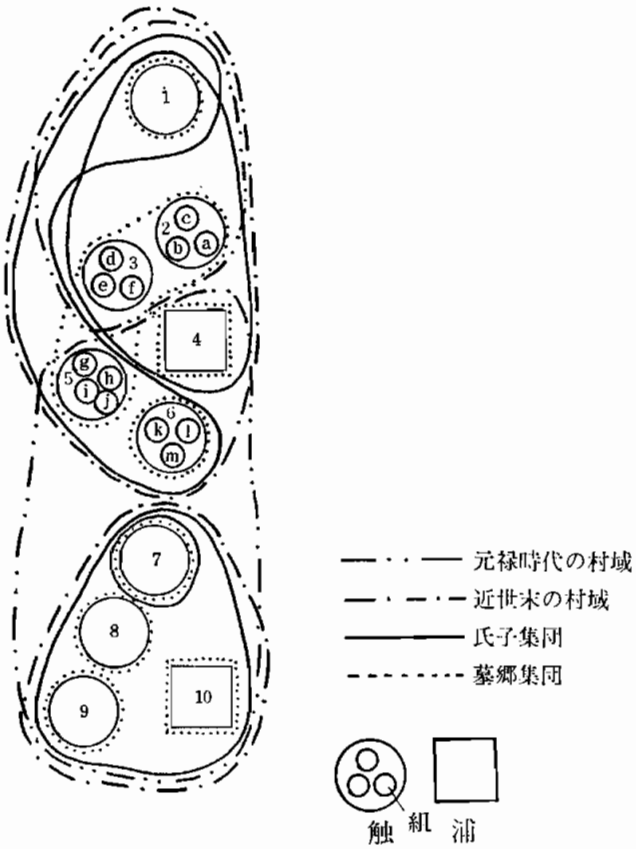
第1表　生月島の集落と地籍



表中の1～10，a～m は第2図の1～10，a～m を示す。

集落名として竹崎触の初牟田と森触の大久保を合せて大久保（その他は竹崎と森），元触の辻と上川を合せて里の呼称がある．さらに正田触と馬場触を組替えて正和・日草とし，本触のみを山田と呼んでいる．

生月島の集落を連らねる自生的地域としての社会集団では近世の一部村と生属村の別，生属村と山田村の別のそれぞれの制度的地域との一致，累積がみられる．氏子集団をみる時，森触に鎮座する白山神社の氏子には竹崎触・森触を加えて御崎の両触出身者，それに一部浦を含み一部浦に鎮座する住吉神社の氏子には堺目触・元触に加えて御崎の両触出身者を含んでいる．さらに馬場触に鎮座する豊玉比売神社の氏子には近世の山田村全体（正田触・馬場触・本触・館浦）を含んでいる．そのほか別に正田触のみの氏神として天満神社がある．また生月島は牧牛が益んであったから御崎の北之平・花火瀬の牧草地は五か触山（御崎・竹崎触・森触・堺目触・元触）と呼ばれる近世の生属村の入会地であり，西海岸の道畔・松尾の牧草地は近世の山田村の入会地である．墓地は触・浦をそれぞれ単位とするなかで前目墓地（堺目）をめぐる竹崎触・森触・堺目触は墓郷集団を形成している．このように生月島の社会集団の枠組には上方（御崎・竹崎触・森触・堺目触・元触・一部浦）と下方（正田触・馬場触・本触・館浦）の両分性が認められ，歴史的地域の継承とみなすことができる．このことは上方に壱岐訛が残るといった方言の多少の相違や思考過程の行き違いなどともからみ今だに統合できない組織のあることと全く無関係ではないように思われる．



第2図　生月島の地域集団

3　かくれキリシタンの特質

かくれキリシタンに古キリシタン，旧キリシタン，昔キリシタン，「はなれ」などといわれ，生月島のほか平戸島・西彼杵半島西岸（外海）それに五島列島に分布する．これらは生月島・平戸島と外海・五島の2系統に分けられ，両者は信仰対象，信仰組織，儀礼などの点でおのおの独自性を有している[14]．苛烈な迫害の中にあって潜伏しながら信仰を持続することはきわめて困難なことで強固な組織によってそれがはじめて可能であった．キリシタン禁制を背景としながらこのようにひそかに信仰が守られてきたことは世界にも例を見ないとされる．外見上，信仰をカモフラージするために彼等は神社の氏子となり，寺

院の檀徒となり，民間信仰をとり入れながらキリスト教を信仰し続けた[15]．いくつかの宗教的信念と行事とが習合し混成した複雑な信仰形態をシンクレチズム (Syncretism) という[16]．もちろんその中心がカトリシズムであることはいうまでもないが，彼等は同信でない外来者を「エレンジヤ (モン)」または「ヨレンジヤモン」，キリシタンを信じない者を「レンチョ」と呼び，自己の集団を他と截然と区別してきた[17]．時代が経過する中でその信仰は次第に変質してやがてカモフラージが本質となり，明治になってカトリシズムそのものを受け入れて教会に復帰することがもはやできないまでになっていた．田北耕也が明らかにしたようにかくれキリシタンのオラショ (祈禱書) が今日，「もんじやもんじや」・「ものもの」として彼等自身理解できないまでに変形していることによっても明らかである[18]．現在，わずかに一部に16戸，山田に49戸のカトリック信者がいるだけであるが，これらは明治初年の布教によって改宗したものでこのようなことはむしろ特異な事例に属し，その後は増加していない．むしろかくれキリシタンとカトリックの間に生じた対立はかくれキリシタンがキリスト教とは異質の相容れない宗教になっていたことを物語っている．

かくれキリシタンが混成教化したことは諸藩の治安維持にとって好都合であり，この宗教をキリシタン禁制の外に置くことができのではないかとも考えられる．日本の社会そのものは宗教に対して寛大な一面をもっている．キリシタンの嫌疑に際しても藩自体，外顕することをはばかってこれを黙殺しようとした．姉崎正治が「徳川のキリシタン法度の如く周密に行はれた禁断でも，やはり隙間はあったので，各藩によって寛厳の別もあれば時の事情と有司の心理とによって，必ずしも一律に周密に又不断に穿鑿が行われなかったのである．外海の一部や五島などには，有司が見て見ぬふりをして居た所もあり，仏寺の和尚すら，表面監視の形式を行って深入しなかった所もあった．」と述べていることは生月島の場合にもあてはまることであろう[19]．徒侍に語源があるといわれる「カッツー[20]」は彼等を監視するために平戸から派遣された存在であったが，長年にわたる禁教下でこの島にキリシタンの発覚が17世紀半ば以後起らなかったのはこのようなことが背景にあったとしか考えられない．

4　かくれキリシタンの組織

九州西北部のかくれキリシタンの戸数については明らかでないが，もっとも数が多く組織化されているのは生月島であるといわれる．今回の調査によって生月島全体で387戸の組

第2表　触別キリシタンの推移

	(a) 田北耕也調査 (昭和初年)		(b) 古野清人調査 (1956年)		(c) 今回の調査 (1976年)		(a)～(c)	
	コンパンヤ数	キリシタン戸数	コンパンヤ数	キリシタン戸数	コンパンヤ数	キリシタン戸数	コンパンヤ数	キリシタン戸数
御崎	6	57	6	56	4	43	2	14
森・竹崎触	21	132	20	116	19	104	2	28
堺目触	22	170	15	79	14	62	8	108
元触	17	100	17	102	17	91	0	9
正田触	16	37	11	32	10	31	6	6
馬場触	9	27	4	11	4	15	5	12
本触	14	47	8	41	8	41	6	6
計	105	570	81	437	76	387	29	183

織化されたかくれキリシタンを得た．これは全戸数の17.0%にあたり，浦にはほとんどみ

られず在のみでは全戸数の41.4%がかくれキリシタンである．昭和初年の田北耕也の調査[21]による570戸に比して32.1%の減，1956年の古野清人の調査[22]による437戸に比して11.4%の減である．もっとも減少が顕著なのは堺目触，逆にあまり減少していないのが元触である．また全戸数に対してキリシタンの戸数の比率が高いのは竹崎の56.4%，元触の53.3%（里のみでは64.9%），御崎の50.0%となっている．最近の傾向として減少にやや

第3表　集落別キリシタン戸数

	世帯数 (1976年)	キリシタン戸数 (1976年)	キリシタンの割合 (%)	農家率 (1970年)(%)	漁家率 (1970年)(%)
御崎	86	43	50.0	59.8	30.4
竹崎	78	44	56.4	63.3	44.3
大久保	66	31	47.0	72.5	40.5
森	60	22	36.7	67.1	19.2
一部浦	678	10	1.5	(0.0)	(54.3)
堺目	187	62	33.2	57.6	4.5
里	74	48	64.9	84.6	9.0
元触	91	40	44.0	66.7	6.1
正和	85	33	38.8	71.4	50.0
日草	69	11	15.9	42.4	10.9
山田	114	43	37.7	47.5	43.3
館浦	683	0	0.0	(5.0)	(67.3)
計	2,271	387	17.0	——	——

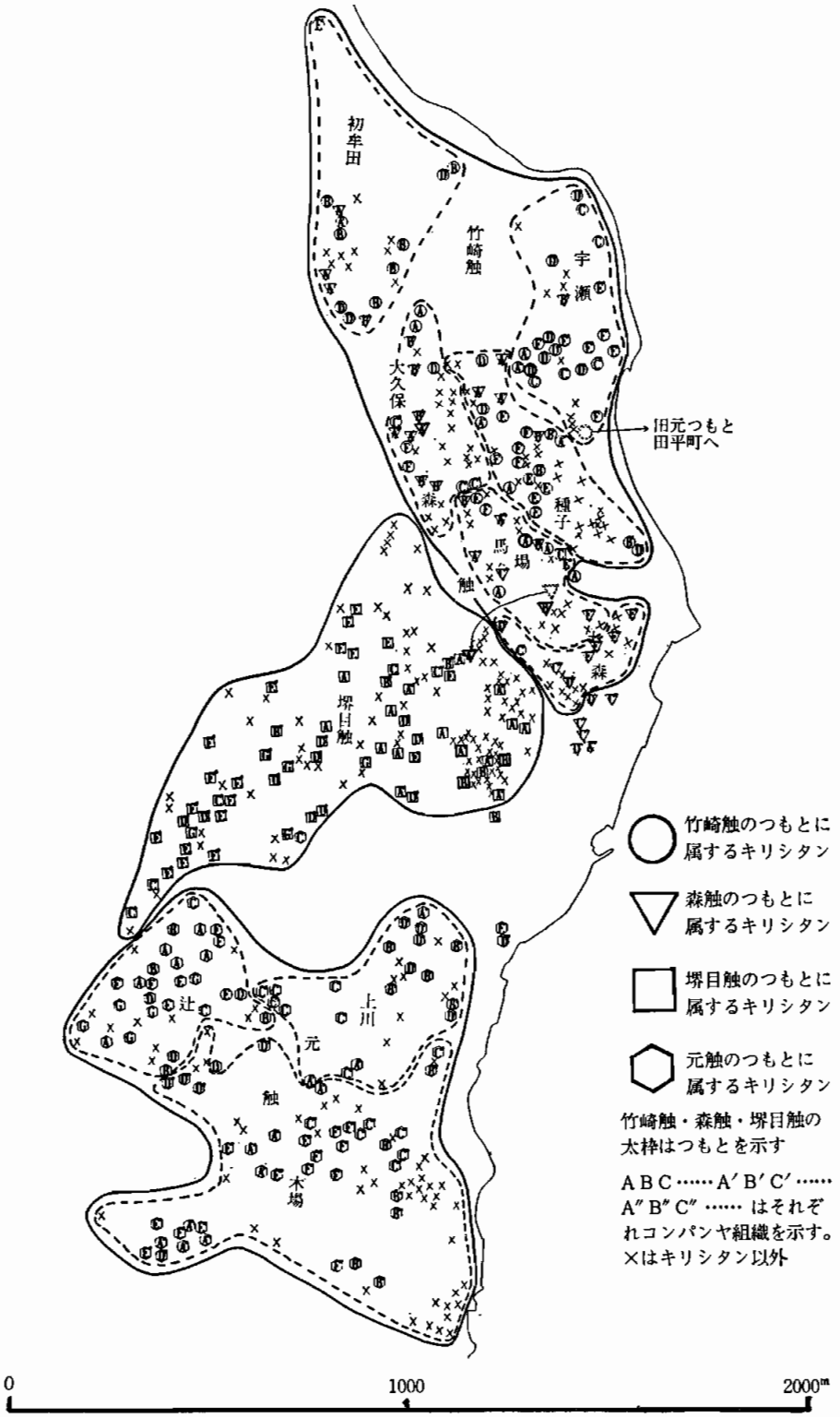
（　）以外は農業集落調査による

歯どめがかかっているとはいえ世代の交替による無関心さと経費負担の重荷によって組織の維持が次第に困難になりつつあることはたしかである．

触または組を単位とするキリシタン組織の中心になる家を「つもと[23]」「お宿」と呼び，その主人である「ご番役」（ご番主・おとつさま）は「納戸神」（うちないの神）を祀つて神父の役割を果している．「ご番役」には世襲・固定・交替の3形態があり，竹崎触・森触では世襲制，堺目触では固定制，元触・正田触・馬場触・本触では交替制をとっている[24]．竹崎触・森触の「つもと」は大岡（宇瀬）・平田（大久保）・川崎（馬場）・増山（馬場）・小川（堺目触）でこのほか，昭和初年まで宇瀬に田元つもとがあったが，田平町に転居したため川崎つもとに合併された．これらの「つもと」は大岡つもとを除き，いずれも移転していると考えられ，復原すれば次のとおりになる．

大岡つもと　宇瀬（竹崎触）
川崎つもと　種子（竹崎触）
田元つもと　大岡または川崎の分派か，不明
増山つもと　大久保（森触）
小川つもと　馬場（森触）
平田つもと　森（森触）

すなわち触の下位の組ごとに「つもと」が置かれていたことになる．堺目触では上宿（うわやど）・中宿（なかやど）・下宿（したやど）の「お宿」は今日，いずれも下組にあるが，それぞれ上組（上組・仁世）・中組（代作）・下組に結びつくものであったと考えられる．元触では「つもと」は辻・上川・木場の組ごとに，正田触では4，馬場触では3，本触では4のそれぞれ「つもと」が置れている．このように「つもと」（お宿）は触または組の範囲内に完結し，組織ができて



第3図　竹崎触・森触・堺目触・元触のキリシタン組織

以来，触・組と一体であったことを物語っている．もちろん移転・分家などによって隣接の触・組あるいは浦に及ぶこともあったが，原初的には広く地縁的関係によって結ばれた組織であった．「つもと」を中心にその触への集中率（御崎集落のキリシタンを除く）をみると本触がもっとも高くて100％，堺目触・元触・正田触がともに97％，馬場触93％で北部の竹崎触77％と森触59％の間には相互の入組みがみられる．

「ご番役」の上に位する「授け役」（爺役[25]）は「おじさま」・「おじい」と称され，洗礼を行ない，司教の役割を果たすが，組織の実体的存在ではない．「授け役」は竹崎触・森触を通じて2人，堺目触に1人，元触の組ごとに1人ずつ，正田触・馬場触・本触にそれぞれ1人がいる．「つもと」の下には後述するいくつかのコンパンヤ（小組・お札仲間）の集団が含まれ，「組宿」の主人は「み弟子」（組親）と呼ばれ，すべて交替制でここでは「ごぜんさま」という「お札」を預っている[26]．このような「授け役」・「ご番役」・「み弟子」さらに一般信徒と続く組織的集団は御支配の意味をもつといわれる「ごしない」（ごっしや・垣内（かきうち）・かけうち・組内）の言葉によって総称されている．このような組織が真にカトリック的なものか，それとも日本的なものかの問題は柴田実によってとりあげられてきた．かくれキリシタンの組織およびその中で行われている行事が宮座と類似し，これをわが国固有の習俗にもとずくとし，民族固有の信仰の生命の故ではないかとした氏の指摘は興味深い[27]．

5　コンパンヤの組織

かくれキリシタンの組織の中でコンパンヤのそれがもっとも基本的である．今回の調査によっ生月島全体でコンパンヤ数76を得た．田北耕也の調査[28]による105に比して29の減，古野清人の調査[29]による81に比して5の減である．コンパンヤの数が減少するということはコンパンヤに含まれる全戸の離脱による場合もあるが，戸数の減少にともなうコンパンヤの併合によることもある．「つもと」単位でみると堺目触の下宿や元触の辻組のように7コンパンヤを含むものから堺目触（もと森触）の小川つもとのように今日では1コンパンヤを含むにすぎないものまである．またそれぞれのコンパンヤを構成する戸数にも差があって1コンパンヤが含む戸数は平均5.1となっている．もっとも大きいのは御崎の堺目触下宿に属する12戸であるが，正田触・馬場触では3戸程度の小さなものが多い．

前述もしたように北端に位置する御崎は今日も「一部なわり」・「堺目なわり」と呼ぶ各触の出身者が入会う開拓集落であるためコンパンヤの構成も複雑である．すなわち平田つもと（森触）に属する7戸，堺目触の上宿に属する7戸，中宿に属する8戸，下宿に属する12戸がそれぞれ独立したコンパンヤを構成している．いっぽう元触の出身者は辻組の6コンパンヤに合計9戸がそれぞれ1～2戸ずつ属している．御崎は奥・目瀬・山頭・多奈田の4地区に分けられ，うち主として奥と目瀬が上組・山頭と多奈田が下組にまとめられてこれが近隣集団を形成し，墓地は全体が東山頭墓地を共有している．かくれキリシタン組織はこれらの地区とは全く無関係で氏子関係とともにそれぞれ本村との結びつき，帰郷意識の強さを物語っている．平田つもとは主として目瀬の西半，上宿は主として奥，中宿は主として山頭の西半，下宿は主として多奈田の東半，辻は主として多奈田の西半にそれぞれ集中しているが，相互にかなり交錯している．このほか御崎にはかつて中宿に属したコンパンヤ（6戸）と大岡つもと（竹崎触）に属したコンパンヤ（9戸）が別に存在していた．前者は奥から山頭にかけて後者は奥から目瀬にかけてそれぞれ分布し，前者は1960年，後者は1965年ともに経費の負担に耐えられず解体した．またこれら御崎のコンパ

第4表　キリシタン組織

触	つもと（お宿）	組	コンパンヤ	戸数	備考	戸数計
2 竹崎触	大岡		A	6		38
			B	6		
			C	4		
			D	8		
			E	6		
			F	8		
	川崎（田元）	→	A′	6		27
			B′	3		
			C′	5		
			D′	6		
			E′	7		
	計		11			65
3 森触	増山		A	4		10
			B	6		
	平田		A′	5		32
			B′	6		
			C′	5		
			D′	4		
			E′	5		
			F′	7	（御崎）	
	小川		A″	4		4
	計		9			46
5 堺目触	上宿		A	6		27
			B	4		
			C	3		
			D	7	（御崎）	
			E	7		
	中宿		A′	4		22
			B′	8	（御崎）	
			C′	3		
			D′	4		
			E′	3		
	下宿		A″	5		40
			B″	3		
			C″	12	（御崎）	
			D″	6		
			E″	5		
			F″	4		
			G″	5		
	計		17			89
			A	8	御崎2）	
			B	6	御崎2）	
			C	6	御崎1）	

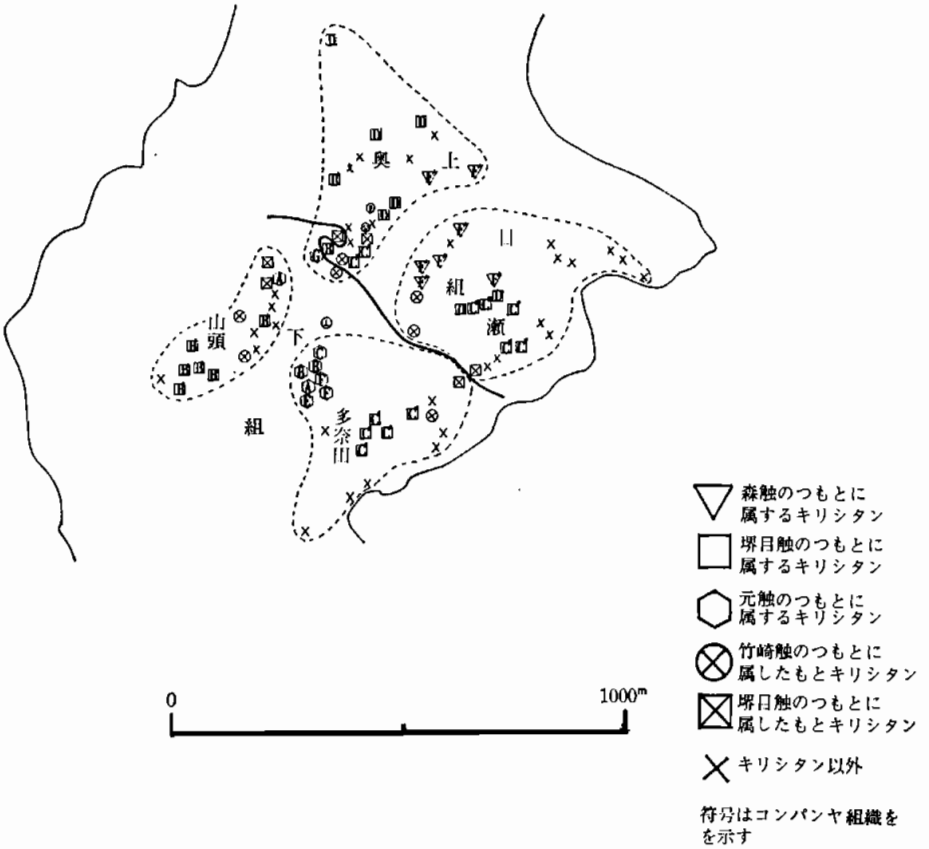
触	つもと（お宿）	組	コンパンヤ	戸数	備考	戸数計
6 元触	Ⅰ	辻	D	4		41
			E	5	御崎1）	
			F	6	御崎2）	
			G	6	御崎1）	
	Ⅱ	上川	A′	5		20
			B′	5		
			C′	5		
			D′	5		
	Ⅲ	木場	A″	6		39
			B″	6		
			C″	7		
			D″	6		
			E″	7		
			F″	7		
	計		17			100
7 正田触	Ⅰ		A	3		9
			B	3		
			C	3		
	Ⅱ		A′	3		9
			B′	3		
			C′	3		
	Ⅲ		A″	3		9
			B″	3		
			C″	3		
	Ⅳ		A‴	4		4
	計		10			31
8 馬場触	Ⅰ		A	4		4
	Ⅱ		A′	4		7
			B′	3		
	Ⅲ		A″	4		4
	計		4			15
9 本触	Ⅰ		A	7		7
	Ⅱ		A′	4		7
			B′	3		
	Ⅲ		A″	9		14
			B″	5		
	Ⅳ		A‴	5		13
			B‴	4		
			C‴	4		
	計		8			41
合計			76			387

第5表　コンパンヤの規模

戸　数	コンパンヤ数	戸　数　計
3	16	48
4	16	64
5	14	70
6	16	96
7	8	56
8	4	32
9	1	9
12	1	12
計	76	387

ンヤはいずれも本村に対して従属的立場にある．例えば平田つもとや堺目触の上宿・中宿・下宿にそれぞれ属する「み弟子」は先役・2番役にはなることができず3番役までであることや辻組に属する各戸は「み弟子」になることがないなどの慣習にそのことが示されている．

コンパンヤを構成する各戸は地域的に分散しているようにもまた集中しているようにもみえる．コンパンヤそのものが何を基準として形成されたかの問題は今日，まだ明らかにされていない．布教に際してキリシタンが組織した組または講の制度が彼等の信仰を充実させ持続させるのに重要な

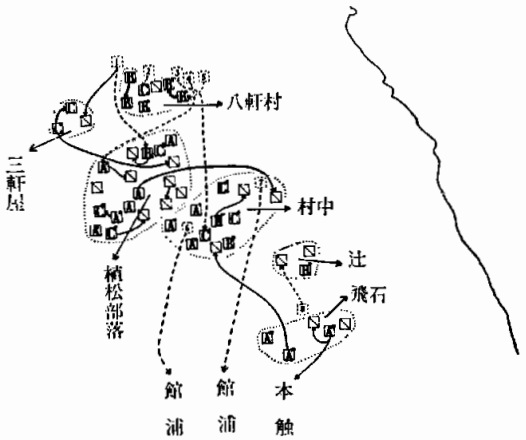


第4図　御崎のキリシタン組織

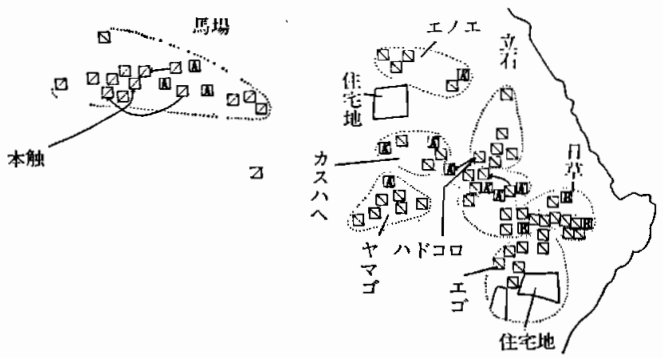
役割を演じたことは見逃せないとの指摘がある[30]．元和4年（1618），ポルトガルの宣教師パーデレ・ジェロニモ・ロドリゲス P. Jeronymo Rodriguez がマカオで完成した文書によれば当時，日本の「サンタマリヤの御組」は小組に約50人の男子を含み，その妻子がこれに加わり，いくつかの小組が一しょになって約500人ないし600人からなる大組をつくり，さらに大きな地方ではすべての大組を一まとめにして親組を構成し，そのほか組には慈悲役（Jifiyacu）がいたという[31]．組をポルトガル語のコンパニア（Conpanhia），コンフ

ラリア (Confraria) によって呼び，これがコンパンヤの言葉をつくり出したと考えるならばこの組織が形を変えながら現在のかくれキリシタンの宗団組織につながる可能性が強い．コンパンヤの起源を近世の五人組制度にもとめる考え方もあるが[32]，生月島には一綴の五人組帳も残っていないのでこれを確認することができない．五人組制度に先行するすでに実体としてあったキリシタンの組にコンパンヤの起源をもとめるほうがむしろ妥当であろう．またこういう見方もある．キリシタン発展の時代に組織化された組は弾圧によって潜伏せざるを得ず，その結果秘密結社として組の再編成を迫られ，むしろ地域的に分散することによって監視の眼をくらまそうとしたとするものである．今日のコンパンヤを構成する各戸が一見分散し，それぞれのコンパンヤが交錯しているのはそのためだとする[33]．古野清人もコンパンヤは原則として地縁にも血縁にもよらない祭祀団体でコンパンヤ内の世帯は必ずしも隣接していないことを指摘している[34]．以上の問題点を本稿によって一挙に解決することは容易なことではないが，可能な限り復原することによってコンパンヤ組織成立の起源をたどることができないであろうかと考えた．

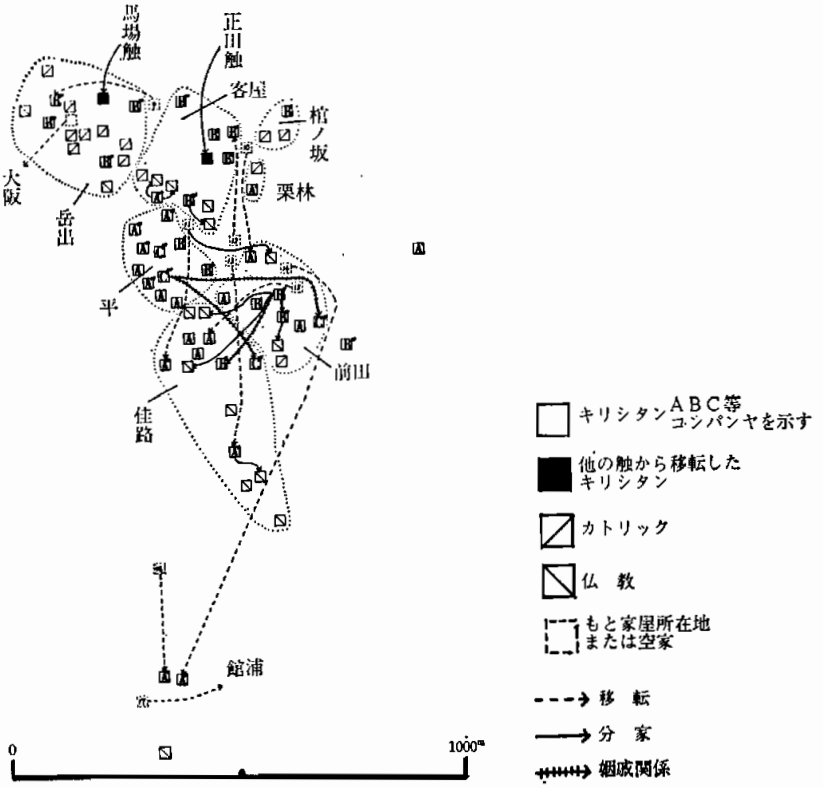
正田触・馬場触・本触に例をとって現時点で可能な限り家の移転状況を明らかにしたのが第5図a～cである．正田触は4「つもと」，10コンパンヤ，馬場触は3「つもと」，4コンパンヤ，本触は4「つもと」，8コンパンヤによって構成されている．各触のそれぞれのつもとを構成する各戸の分布にはかなりの交錯が認められる．このうち正田触の北端の1～5および本触中央部の11～15については1910年5月，1914年6月およびその後の地すべり[35]によってそれぞれ現在地に移転したといわれる．これらを含めて移転以前の分布をもとにして復原すると次のとおりになる．正田触ではA～



a 正　田　触



b 馬　場　触



c 本　　触

第5図　山田在のキリシタン組織と家屋移転

Cグループは三軒屋から八軒村・植松部落にかけての地区，A′～C′ グループは八軒村から村中にかけての地区，A″～C″ グループは植松部落から村中にかけての地区 A‴ は飛石地区に集中する．本触ではAは平から佳路にかけての地区，A′ B′ グループは客屋地区，A″ B″ グループは前田から平にかけての地区，A‴ B‴ グループは岳出から平にかけての地区に集中する．馬場触は移動がみられずAは馬場地区，A′ B′ グループはハドコロから日草にかけての地区 A″ はカスハヘを中心に集中している．もっとも明治以前の移動が明らかにできないためこれ以上のことがわからないが，集団からとび離れて所在する家も過去の時代に何らかの理由によって移転したことがわかればこの問題は解決に向うかもしれない．なおカトリックを信仰する集団が山田教会を中心にして馬場触から本触にかけて分布する．これらもかつては当然それぞれの「つもと」に属し，コンパンヤを構成していたはずである．このようにみてくると一見分散しているようにみえるそれぞれのコンパンヤの構成もかなり集中し隣接して集団を形成した形で復原できることになる．このほか堺目触や元触の例からも移転をもたらした要因の一つが地すべりであることは注目される．全島にわたって地すべりが進行した生月島でコンパンヤの交錯が主としてこのために生じたであろうとする考え方もなりたつように思える．正田触・馬場触・本触では分家すれば組織的集団には加われず，このことがキリシタンの減少を招くことにもつながっている．北部の一部在では分家しても集団内にとどまる例があるが，山田在ではこのことがきびしく守られており，むしろこの方が原初的形態に近いと考えられる．この意味においてかくれキリシタン組織は一統の結びつきを前提とする血縁的集団ではないとする考え方が有力で

ある．

む　す　び

(1) かくれキリシタン組織の単位である「つもと」（お宿）は触および触の下位の組ごとにその範囲に完結し，組織の成立以来触・組と一体であったと考えられる．

(2) 在に多いかくれキリシタンは漸減傾向を示していて世代の交替による無関心さと経費負担に耐えられないことなどによって組織の維持が次第に困難になりつつある．

(3) コンパンヤを構成する各戸は地域的にかなり分散し交錯している．しかし家の移動を復原することによってこれを地縁的集団としてとらえることができそうである．

(4) この集団形成の基準が何であるかを明らかにすることは容易でないが，禁教以前の組例えば「サンタマリヤの御組」が形を変えながら現在の組織につながったとする考え方が有力である．

(5) 開拓集落である御崎は各触の入会によって成立した集落であるためかくれキリシタンの組織では本村への帰郷意識が強くまた本村に対して従属的立場にある．

(6) 家の移動をもたらした要因の一つが地すべりである．地すべりが全島の39.5%に及ぶこの島の集落立地がきわめて制約されたものであることを物語っている．

注

1. 田北耕也：「昭和時代の潜伏キリシタン」1954
2. 古野清人：「隠れキリシタン」1966
3. 柴田　実：生月の旧キリシタン，京都大学平戸学術調査団，平戸学術調査報告，1951
4. 片岡弥吉：「かくれキリシタン―歴史と民俗」1967
5. ①安藤武・大久保太治：長崎県生月島における地すべりの構造特性について，防災科学技術総合研究報告第32号，1974
   ②大久保太治：長崎県生月島における地すべりの地下水について，防災科学技術総合研究報告第32号，1974
6. 生月町：「生月町営42災松本地区災害復旧工事計画概要書」1969
7. 近藤儀左衛門：「生月史稿」1977，p. 55.
8. 藤本隆士：幕末西海捕鯨業の資金構成―生月島益富家の場合，創立30年福岡大学記念論文集，1964
9. ①朸頭が藩命を触れ伝えた範囲の意（折茂順平による）
   ②朝鮮語のプル（村を意味する）から来たという説
   ③奄美大島の部連（ぶれ），徳之島のハリまたはバリと同じく村を意味する古語であるという説（浮田典良：壱岐の集落と触<地形図に歴史を読む第4集>，1972）
10. 折茂順平：壱岐島の触集落，社会地理24，1950
11. 朸頭の朸とは地割の際の審議の意（折茂順平による）
12. 山口麻太郎編：「平戸藩法令規式集成，中巻第6編第1在方」1958
13. 藤野保：「新訂幕藩体制史の研究」1975，p. 662.
14. 桜井徳太郎：「日本民俗学講座第3巻」1976，p. 262.
15. 元触に永光寺(臨済宗)，館浦に法善寺（浄土宗）があってかくれキリシタンの檀徒が多い．その他，日蓮宗・真言宗・天台宗の寺院がある．
16. 古野清人：生月のキリシタン部落―特にその祭祀組織について，九州文化史研究所紀要第5巻，1956，p. 10.
17. 16に同じ

18. 田北耕也：「昭和時代の潜伏キリシタン」1954
19. 姉崎正治：「切支丹宗門の迫害と潜伏」（姉崎正治著作集第1巻）1976, p. 29.
20. 田北耕也・片岡弥吉によれば反キリシタンであった加藤氏に由来するという．加藤氏の根拠地であったと伝えられる元触下木場の妙見は今日も全戸が仏教徒である．
21. 18に同じ
22. 16に同じ
23. 宿元の転訛といわれる．
24. 元触の辻は年期が決っていない．上川は5年，木場は3年，正田触は4年，馬場触・本触はともに5年でそれぞれ交替する．
25. 禁教前の Jifiyacu. に語源があるといわれる．授け役は私生活の上で禁忌が課せられている．
26. 古野清人は「お札」を「ごぜんさま」というとしているが，田北耕也は「ごぜんさま」を壁画または聖像で狭義の納戸神としている．「お札」は長さ1寸2分から1寸5分ほどの木札で表には十字と1から5までの番号と簡単な文字が記され，裏にも墨書がある．札は大体16枚1組でロザリオの十五玄義の文句と関連があるといわれる．原則として毎月の第一日曜日の朝，「み弟子」のもとに集って札を戴く．田北耕也はコンパンヤがロザリオの祈りのための講社であったことを確認させる有力な資料であると述べている．
27. 柴田実：生月の旧キリシタン，京都大学平戸学術調査団，平戸学術調査報告，1951, p. 163～4.
28. 18に同じ
29. 16に同じ
30. 古野清人：「隠れキリシタン」1966, p. 37～8.
31. Joseph Schüttes J, 柳谷武夫訳：二つの古文書に現はれたる日本初期キリシタン時代に於ける「さんたまりやの御組」の組織について，キリシタン研究第2集，1944，このことについては姉崎正治が紹介している．
32. 片岡弥吉は五人組の名残りではないかとも思われるとしている．
33. 調査に際してこのような考え方のかなりあることを知った．
34. 30に同じ p. 148.
35. 5①に同じ

付　記

本稿は歴史地理学会（1977年第20回大会）で発表したものをその後，訂正加除したものである．本稿作成にあたってご協力，ご助言を賜った生月町長近藤儀左衛門，生月町教育長石田安一両氏，さらに調査にご便宜をお与え下さった生月町山田農業協同組合参事富田栄氏に心から謝意を表する次第である．

Summary

The "Hidden Christians" are to be found in the north-west of Kyūshū, i. e., Ikitsuki Island, Hirado Island, the west coast of Nishisonogi Peninsula (Sotome), and Gotō Islands. Gradually the number of such "Hidden Christians" is diminishing. Two reasons are given for this; one, indifference on the part of the younger generation; two, the financial expense involved in belonging to such an organization.

The "Fure Communes" is made up of various smaller groups. The Centre of the "Fure Communes" or group is the "Tsumoto". The area of the "Fure" or group is the same as that of the parish of the "Tsumoto". Within the "Tsumoto" are various "Kompanya-companhia". The homes belonging to these different "Kompanya" are all mixed together-they are not separated into different geographical regions. Originally

they were all separated according to what "Kompanya" they belonged to. Landslides are one reason given for these people moving their home to other regions. There have been repeated landslides for hundreds of years over 39.5% of Ikitsuki Island. This explains why the "Kompanya" have become mixed together as they are today.